術前化学療法、乳房切除術後に、術後化学療法を受けたGさんとお子さん

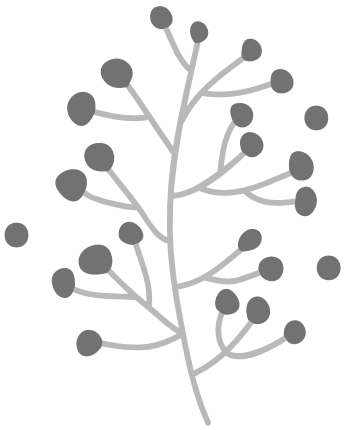
（幼児期、学童期、思春期、青年期　四人）

脇の下にしこりがあって、乳がんかもって思った。でも、まさか自分ががんになるって思わなかった。四人の子どもへ伝えた時の、それぞれの子どもの反応は、やっぱり「マジ？　死ぬの？」が最初でした。

看護師　初めて診断を受けた時は、どんな感じですか？

Gさん　最初は、もう一年半くらい前から脇の下にコロってあったんです。友達にも触ってもらって。なんかやばいよねーって言っていて。怖くなって携帯で調べたら、やっぱり最初、乳がんかもって出たんですよ、「わきの下のしこり」で調べたら。そして、でもその時は、触ってみようって触った時には、何もなかったから、じゃあ違うと思って。次の項目を見たら、脂肪の塊と書いてあったから、じゃあそれだって思って。そこで放っておいて、かれこれ一年くらい経って。そしたら、今度は、仕事をやっているうちに、何の気なしに脇の下を触った時に、なんとなく大きくなっているような気がして。もしかしてって触ったら、もう触った感じでおっぱいのところにあって。次の日に、慌てて病院に行くぞと決めて。子どもたちには、どうしようって思ったんだけど、私こういう性格なので、騒ぐんですよ、もう一人で。「やー、どうしよう、やばい！」とかって。「おっぱいにコロコロあるー」って。もう騒いでしまって。その時に、またネットで調べたら、まず乳がんがきたから、「うわ！　怖い。お母さんがんかも」って、わーって騒いで。皆に「病院に行った方がいいよ」って。私はすぐそこらへんにある病院で良かったんだけどね。お父さんに、「大きい病院に最初から行け」って言われたんだけど。でも、絶対乳がんだって出るわけじゃないし、がん家系でもないし、まさか自分ががんになるって思わなかったから、「いいよ、自分の行きたい病院に行く」って言って。病院に行ったら、そこでもう「がん」って分かっちゃって。もう、今日お母さん病院に行ってくるって公に言っちゃったから、子どもたちは、「どうだったの、病院？」みたいな。でも、まさか子どもたちも、がんっていうのは縁が遠いものだと思っていたから、お母さん

が前に調べた時に言っていた、乳腺なんとかっていう（病気）もあったから、「それじゃね？」なんて言っていたから。診断受けた帰りに、子どもたちをひとりずつ、お迎えに行ったんだよね。雨降っていたから、いつもは子どもたち自転車通学なんだけど。お迎えに行ったら、まず三番目に、「お母さん、なんだった？」って言われたのね。うわー、って思ったんだけど、でもしょうがないって思って、「がんだった」って言ったら、「マジ？」みたいな感じだったの。「がんて、どうなの？　死ぬの、やっぱり？」みたいな感じで、わーって言われて。で、次に一番下を迎えに行ったら、やっぱり、「お母さんどうだった？」って聞くのね。でも、がんって言っても分からないから、



「うん、ここにね、ちょっと悪いできものができたから、これからどうなるか分からないけど、とりあえず、そういう病気だった」って。「分かったー」って。次は上のふたりを、部活動をやっていたんで迎えに行ったら、その時はもう、ふたりとも（私が）病院に行ったことさえ忘れてて、疲れてて、部活で。だから、「おう、お帰り」みたいな感じで言ったんだけど、なんていうことはなかったね。だから、病気どうだっていう話もなく。そしたら、助手席に乗っていた一番下が、「お母さん、言わなくていいの？　言わなくていいの？」って言うので、「そういえば病院だったんだよね、今日」みたいな。「どうだった？」って聞いてきて、「もしかして、がん？」って子どもから言われたから、「うん、がん」って。「マジ？」って。上のふたりも、やっぱり、「死ぬの？」って。やっぱりねー、「死ぬの？」からきて。で、それでなんか、自分もそれまで気丈に振る舞っていたけど、その、「死ぬの？」の言葉でなんか、「えー、どうしよう……」みたいな。でもまあ、「大丈夫だよー」っていう感じで、子どもたちには、もう自然の流れで、がんは分かられてしまった感じ。あとは、そこの病院では、どうにもならないからっていって、ここの病院を紹介してもらって。（前の病院が）できないんですって。何もできないから、ここの病院を紹介されて。

超音波検査で「がんだね」って言われて、その場で泣いた。どうしようもなく、もうどうやって会計したかも覚えていない。一年分泣いた。

看護師　最初に、「がんです」って言われた時は、Gさん自身はどう思ったんですか？

Gさん　もう、泣いた。もうその場で、だって、超音波やったら、「ああ、これがんだね」とかってもうすぐに。あ、違う、その前に（医師から）、「今日は一人で来ているんですか？」って言われたんだ。で、「ご家族の方は、いないですか？」って言われて。えー……、みたいな。「来てないです、私一人ですけど」って言ったら、「これ、見てもらったら分かると思うけど、これが

がんなんだよ」とかって言われて。えー、みたいな。もう、ダーっ（涙）ですよね。でも、どうしようもなく、もうどうやって会計したのかも、もう全然思い出せない。どうやって車に乗ったかを忘れるくらい。いつの間にか会計も終わっていて、車に乗ったのだけど、一時間ぐらい、もう泣いて泣いて、車で。発進できないんですよ、駐車場から。それで一時間ぐらいしてから、一番仲のいい友達と、旦那と、あと、ばあちゃんの三人に電話して、がんだったっていうことを泣きながら伝えたら、励ましてもらったこともあったから、少し落ち着いて。もうどうしようってなって、死ぬことばっかり考えちゃって、私死んじゃうのかな？　って。お母さんとか、友達とか、旦那とかの、慰めてくれる言葉なんだよね。それで救われて。その日は、仕事を午前中だけ休ませてもらっていたんです。昼間は病院に行きたいから、夜は出勤しますって言って。でも、こんな状況で行けないと思ったから、夜も。だから、今日だけは休ませてくださいって、お店に直接言いに行きました。そしたら、みんなしこりのことで病院に行っているってわかってたから、もう、考えていることは一緒だったんだよね。職場に行って、そしたら、皆が、「どうだった？　どうだった？」って聞くから、「こうだった」って言ったら、もう皆泣いてさ。それにつられて私も、一年分泣いたかも知れない。その、病院から、車の中から職場行くまでの間に、とにかく全部泣いて。一年分泣いたよね、会う人会う人の前で泣いちゃって。店長に、こんなんじゃ夜仕事できないから、どうにか人探すからって、一日仕事休んでいいよって言われて。電話で話すより、直接職場のおばちゃんとかさ、そういう人からも力もらって。ちょっと病気の場所は違うけど、子宮がんになっちゃった人も職場にいたから、そういうこと今まで誰にも言わなかったけど、こういう風になったから気持ち教えるから、って言われて。その人も、本当はがんだってことを隠して仕事していたんだよね。私がそうなっちゃったおかげで、皆に知られちゃったから、悪いことしちゃったかなって思ったけど、すごい勇気づけられたし、それで今も働いているし。結構もうおばちゃんなんだけどね、それでも十年経ってもこうやって、仕事やっているっていうのを聞いてると、もしかして、そんなに大変な病気じゃないのかなって思った。それからの帰宅だったので、そしたら、旦那の方があれですよね。昼の休憩時間に戻ってきて、職場から。何回もほら、携帯を車に置いてたから、いっぱい着信入っていたんだよね。「何やっているの？　どこ行っていたの？」みたいな感じで。家に戻ったら、休憩時間に、お父さんの方がどきどきしていたみたいで、戻って来て、「大丈夫か、大丈夫か。落ちつくんだぞ、落ちつくんだぞ」って。私もう、結構落ちついてるけど。それから、子どもたちを迎えに行くまで、三〜四時間あったので、随分落ち着いてはいられたかな。

看護師　色んな人と、ちょっと話したことが（よかったですか）。

Gさん　それが良かったかな。たまたま、なんですけどね。本当だったら、電話で終わっていたら、あとずっと仕事だったけど、たまたま仕事の断りをしなくちゃいけないから、職場に行ったのも良かったのかなって。

看護師　もともと皆にも、今日病院行くって言っていたし。

Gさん　そうそう、触ってもらっていたからね。「やばいよ、やばいよ」って言っていたから。

がんかもしれないって騒いでいたから、子どもに嘘はつけなかった。もともとオープンな家庭環境だったし。結果、私は良かった。

看護師　お子さんに、どう伝えようとか悩んだりはしませんでしたか？

Gさん　うん、悩まなかったかなあ。行く前から、「お母さんがんかもしれない、がんだったりしてー、ほら、このしこりはがんとかって書いてあるし」とかって、本当は冗談で言っていたのだけど、まさか本当に当たっちゃったから。がんだとか騒いでたし。言っちゃった方がいいや、みたいな。嘘もつけなかった。例えば、お父さんとお母さんがケンカして、それを何かあったよね？　って子どもたちが、勘繰り出すじゃないですか。それで、その時に、ケンカしてなかったんだよ本当は、みたいな、嘘とか隠したりするような生活だったら、もしかしたら、がんのことも隠せていたのかなって思うけど。うちはお母さんこういうふうに言ったら、お父さんこういうふうに言って、二人でケンカになったとか、お父さんムカつくんだよとか、オープンっていうのかな？　隠されて育っていないっていうか。良いのか悪いのか、そこは分かんないけど。でもたまに、「ええ〜、それ聞かなきゃ良かったし〜」とかいうこともあるけど、隠さず言っちゃって。失敗に終わることもあるけど、そういう流れできたから。皆には、「子どもに言ったの？」とか、うーん。やっぱりそれって、家庭の環境だよね、と思って。言っちゃったけど、結果私は良かったと思った。うん、今になって。でも子どもは傷ついた時期はあったみたい。なんていうんだろう、がんは、乗り越えていきたいんだけど、毛が抜けるとか、抗がん剤とかで。人に聞くと、「旦那にも、未だに帽子を被って隠している」って言うのね。私バーって、バリカンで刈って、「ほら、これ！　さっぱりしたでしょ？」と子どもたちに言った時は、上の子に、「……頼む、お母さん……前もって、ちょっと……」とかって言われて。その時、私も同時にショックは受けたんだけど、「こいつ、ショック受けているんだ〜」みたいな。

看護師　お子さんが、ショックを受けているのを見て、Gさんがショックを受けたのですね。

Gさん　そう。ガーン……と、思ったんだけど、夏こんなに暑い時に、子どもの面倒をみながら汗ふいて、っていうのも結構厳しかったから。最初に言って、バリカンで切って、くりくり坊主だっていうのもばれちゃうと、私家で帽子かぶってないし。ピンポーンとかって鳴った時に、子どもに、「お母さん、被ってない」って言われて、「あ、わかった、わかった」みたいな。

看護師　最初のショックっていうか、衝撃を乗り越えれば。

Gさん　そう、大丈夫。うちはね。私も子どもも、大丈夫だったかなあ。

子どもたちは自分でできることを手伝ってくれるようになった。そして優しくなった。「お母さん、長い髪よりね、はげの方が好き」って言ってみたり、お花を摘んできてくれた。

看護師　お子さんの反応で、気になることはありましたか？

Gさん　優しくなった。全部、なんだろう、全体を見て。細かく見れば、髪が抜けた時の反応はこうだったとかっていろいろあるけど。今、こうなって、手術の前に抗がん剤で、やっぱり一泊で家を空けた時に、「米を研ぐのを覚えたから」とか、なんか、「洗濯干す時このまま干すとダメなんだねー」みたいな、「パンパンって必要？」みたいな、そういう、小っちゃいことだけど、そういうのを覚えて。あと、私が抗がん剤で一泊する時に、ゴミ捨てが（曜日に）入っているから、そうすると、お父さんが多分やらせてるんだよね。お前ゴミ出し頼むよ、みたいな。そうすると家に帰って来ても、もうそれが身に染みついちゃってて、ゴミ出しをしてくれているっていうか、私が居るのに。「いいよ、お母さん捨てるから」って言うと、「いいよ、いいよ」みたいな感じでそれがもう身についてきたりとか、なんだろう、小っちゃいこと、小っちゃいことが全部ね、大人になった。

看護師　それぞれに？

Gさん　そうだね。一番下はね、まだ、幼児だけれど、優しくなった。（その子が）「お母さん、長い髪よりもね、はげの方が好き」って言ってみたり。それが本音なのかな？　それとも、私を励ましてくれるのか。幼児で嘘は、つけないしなーと思ったりして。本音なのかな？　ちょっと抗がん剤で具合悪くなると、「お母さん、今日ダメ？」と聞くから、「お母さん、今日ダメ」と言うと、「待っててね」って言って、お外に行って、お花を摘みに行くんですよ。たんぽぽだったり、あと小っちゃい紫っぽいお花だったりね。冬とかになると、もう花もないでしょう？　だけど、なんとか色のついているのを持って来たり。で、こうやって（背中に隠しながら）持って来てね、「じゃーん」って見せて、「えー？　何ー？」とかって。「お母さん、具合悪い時は、プレゼント」って。その時に、「お母さんが手術したら、本当のお花をプレゼントしに、お見舞いに行くね」って言われてすごく喜んだの。本音っていうのもあるし、まあオーバーに、「ありがとう！」って。だから、褒められるっていうのも、見ててやっぱり嬉しいんだよね。お母さんはお花をもらえると嬉しいと思っているみたいで。入院したらおっぱいの手術の時は、お花持って行くねって言ってくれて、本当に持って来てくれて。

（病気のことを子どもは）オブラートに包むように幼稚園の先生に話すことができていました。お弁当作っていくんです、うちの幼稚園って。おかずとご飯を一つのところに入れているんだけど、本当に具合が悪くって、作れなくって、お弁当にご飯だけ入れて、ゆかりだけで、「ごめん、これで

行ってくれ」っていう日があったんですね。多分、「お母さん具合悪いの？」って先生が聞いてくれて、お弁当見てびっくりして、先生も。でも、その時はみんなから（おかず）もらって、白ごはんしかやってないのに、（お弁当箱に）カップとか入っていて、誰々からもらったんだーっていうのが分かって。その時先生から、「お母さん、今日大丈夫ですか？」と連絡が来て。いつも（お弁当に）おかず入っているのに、今日はご飯だけで、大丈夫？　と聞いたら、「言わない。お母さん、大丈夫だよ。先生に言わない」って。一応私のこと隠してくれたんだけど、言いたいっていう気持ちも出てくるみたい。（先生に）「これ、お母さんには内緒ね。あのね、布団で寝てた」とかって感じで。そのくらい辛かったっていうことを、家であった出来事を結局は、先生に全部言ってしまったけれども、最初は、「言わない」って（子どもが）言って、なんか守ってくれているんですよねー、隠してくれているんですよねーって。

看護師　言ったら、お母さんが嫌かな？と思ったのでしょうね。

Gさん　うん、そうそう。下の子は、「大丈夫ー？」って言うようになった。例えば、他のお友達が転んだりすると、一番最初に言ってくれると、先生が教えてくれた。「大丈夫？」って先生にも声かけてくれて、「とても優しいです。今振り返ると、お母さんの病気が発覚してからっていうかね、具合悪くなってからかもしれないですね。ちょっと変わりましたよ、良い方に変わりました。」って。ああ、良かったなと思います。

私ががんって分かった日から、学校で子どもの態度がおかしくなって、投げやりになっていた。ただ、一番上はやっぱり、学校でちょっとあったみたいで。いつもギャーって騒ぐキャラだけど、私ががんって分かった日からは、もうこういう感じで伏せていて。私も分かってから、すぐに学校に言ったわけじゃないので。先生が、「おかしい、今日」って。「おい、どうした？」って言ったら、「いえ……」とかって、とにかく、もう投げやりだって。それで、「後で（理由）分かっから」みたいな感じで。これはそっとしておこう、みたいな感じで。先生がこれは家庭で何かあったと思って、お母さんにもう少し続いたら連絡しなきゃなって思っていたらしいんですよ。ところが、三日、四日続いたけど、（子どもの態度が）戻ってきたみたいなので、私に連絡は来なかったんです。私から、「実はこういうことあった」という電話をかけたら、「それでだったんですね」って。先生から、「実は、私もおかしいと思ったから。聞こうと思っていた矢先だったのですけど。落ち着いていったので、聞きませんでした」って。でも、こういうことがありましたよって教

えてもらいました。

看護師　がんと分かった頃ですか？

Gさん　分かった頃。髪の毛抜けた時も、そうだったらしい。机をバーンと蹴ったんだって。それはね、何もないのにやるわけじゃないんだけど。例えば友達とくだらないことをしゃべっていて。いつもだったら、「つーか、ばかじゃね〜の〜？」ぐらいで、終わるのが普通。でも、その時は、言われた時に反応もしないで、「ばっかじゃねーの？」っていう感じで、お友達ともそんなにうまくいかなかったみたいで。そのころには、先生も分かっていたから、「なんか家であったの？」って感じで言ったら、「先生も、見れば分かるから……」みたいな感じで言われたって。その日だけ。やっぱり、あとはふっ切れたみたいで、「お母さん、学校に行く時は、絶対（かつら）かぶって来てね」とか、そういう感じになったから。後は、何もないって。一番上には、そういう心境があったみたい。

看護師　診断受けた日は、家ではどうでしたか？

Gさん　まあね、がんって分かった日は、別に何もなかった。でも、「お母さん死ぬの？　死ぬの？」みたいな会話があったけど、「大丈夫だよ。まだ、紹介された病院にも、行ってみないと分からないから」って。不安だったけど、とりあえず、「んな（そんな）わけないじゃん、死ぬわけないじゃん」みたいな感じで言ってて。それから、別に普段と変わらないし、抗がん剤でやられているわけじゃないし、普通だから。やっぱり、普通のお母さんを見ていると、「なんだ、普通じゃん」って。単純だよね。そこから二〜三日が過ぎて、普通のお母さんをしていると、別にいたわるほどじゃないし。抗がん剤始まるまでは、至って普通だったかな。（抗がん剤治療始まって）髪の毛はね、やっぱりね、「うわー……」っていう目で見てたけど。でも坊主にしてよかったのかな、なんか逆に。抗がん剤をやっていても、少しずつ生えてきたり、生えて抜けて、生えて抜けてみたいな感じで、「おお〜、お母さん、いいんじゃねー？」みたいな。ちょうどたまたま、つるーんってなった時に、ハリーポッター・シリーズが、やっていたんだよね。その時に、『ヴォルデモート』！　見ていて、みんながこう、ふー……って私の方を振り向くの。家で帽子かぶってないから。それで、「つーか、……似てね？（似ているんじゃない）」っていうような、そんな感じ。なんか、男の子だったから救われたのかな、もしかしたら（笑）。

看護師　そういうふうに、ちょっと冗談っぽくいじってくれた方が、救われる感じがあったのですね。

Gさん　うん。それで、自分もｉＰａｄとか、そういうの持っているから、わざわざ、『ヴォルデモート』で検索して出して、「じゃーん」とか見せて。なんか、遊ばれている感じ

かな？　今となっては。（子どもが）「あっ」て思ったのは、ほんの一瞬で、後は、優しく労わられている日々が、続いている感じです。

次男は反抗期と重なって、「がんって痛くないの」とか後から、ぼそぼそと聞いてきた。

看護師　長男さん以外の、他のお子さんはどうでしたか。

Gさん　学校で、三者面談があり、先生と話したときに、「（私が病気に）なってからは、どうですか？」と聞いたら、別に普通に、そういうことが、あったなんて思わせない感じだったし、なんてことないみたいな、って言ってたので、別に至って変わらないかな。聞いたからと言って、「え、お母さん、すごいねこの頭」って言うわけでもなく。自然にスーッとこう、流されて。それもそれで寂しいような、うん。

看護師　特に反応なく。

Gさん　うん、でもね、なんか髪の毛が抜けて、すごいこの辺（後頭部）が、もたもたになっていて、しまいにはガムテープで、ペタペタ取っていたの。その時に手伝ってくれた。こっち届かないっしょ？「取ってやっから（やるから）」みたいな。でもね、次男はね、反抗期に入っているから、なるべく私と触れ合いたくない時期で。今は、それを通り越した。抗がん剤で「うーん」って、なっている時が、一番（反抗期が）真っただ中かな。それでなんか、まあ、原因はお父さんだったみたい。お父さんに反発して、お父さんに言われることが、うざいっていうか、ムカつくみたいな。お父さんが一週間ぐらい出張に行ったのをきっかけに、なおったんですけどね、その反抗期が。

看護師　反抗期は、いつから始まったのですか。

Gさん　えーっとね、やっぱり中学校入って間もないぐらいからかな。私、これ（病気）分かったのも、そのころだから、ちょうど、いろいろかぶっちゃったんだよね。だから、しゃべりが、ぼそ……ぼそ……なの、全部。「お母さん、死んじゃうの、へー……。マジ？」みたいな。「え、抜けたんだ、へー……」みたいな感じで。それで、一応話すけど、他の兄弟ほどでもなく。するーっといった感じですね。だから別に、身体のことにふれるわけでもなく、大丈夫？って言うわけでもなく、でも皆分担して手伝ってくれてるから、おれもやんなくちゃいけないのかなーみたいな感じで。なんか恥ずかしいのもあるんだよね、お母さんに、「大丈夫？」って言うタイミングも逃したみたいな。「これ、片付けといたから」とか、「ここ拭いといたから」ってテーブル拭いてくれたり、そういうのは、結構次男がやっていてくれるかな。それで、お父さんが、出張でいなくなった瞬間に、はじけちゃって、「お母さん、お母さん」とかって。一緒に寝たんですよ、その日。今まで、一人で寝ていたんだけど、分からないけど、居間に布団を持って来て、「一緒に寝てみっか」みたいになったんだよね。その時に、次男が一緒に寝たんですよ、もう、すごく久しぶりに。反抗期が長男になかったから、（次男が）初めての反抗期だった。どう接すればいいのか分かんないし、でも、もう自分こんなん（化学療法）でちょっと気持ちが悪い時もあったし、なんだか訳分かんないってなって。でも、お父さんが出張に

行っていなくなった瞬間に、そういうふうになってくれて、ものすっごく嬉しくて、泣いたの。一緒に寝ていた時に、「あ、がんって、痛くないの？」とか、今まで聞けなかったことを聞かれて、「全然痛くないんだよね」って。「ふーん、じゃあ、まあ、いいんだ」みたいな。「痛かったら、ひどいよね」とか、ぼそぼそって言ってきたんだけど。一応寝たけど、背を向けてね、今だけ、みたいな感じで（笑）だからね、次男は、抗がん剤とか、がんとか関係なしで、ちょっと気を遣った。

看護師　反抗期を、どう接していいかとかね。

Gさん　そうそう。

看護師　次男は、ずっと聞きたかったことが本当はあったのですね。

Gさん　「痛くないの？」っていうのは、聞かれた。

看護師　次男だけ、乗り遅れたんですね。

Gさん　「今更だけど……」みたいな。お父さんは、次男の反抗期は「あれ、お母さん（のせい）だよ」って言っているのね。「俺は何にもないから」って。次男からは、「お父さんさ、ムカつくんだよ、こういうとこ」って話していた。がんのことについては、その、「痛くなかったの？」しか聞かれなかったけど、あとは、もう全部、「実はさ、お父さんさー、こういうところ、むかついてさ。こういうことやんなくてもいいのにやれって言ってくるし」って。ああ、そこだったんだ、それに対しての反発だったのかなみたいな。ちょっと言葉で、「こういうふうに言われてさ」って言ってくれれば、原因が分かったんだけど、言わないのよね。だから、なんで、階段ドンドンドンドンって上がっていくのかも分からないし。私が原因かなあ？　はげているのが駄目なのか？　どうなのか？　とか、分からないからさ、そう。

看護師　何がこう、気に障っているのか。

Gさん　今、部活で結構良いポジションにいるから。お父さんは、そのポジションを守ってほしいがために、基礎練やれとか、家に帰っても、それをやんないとそのポジションを守れないぞみたいなことを言われるのが嫌だったみたい。次男の中では、部活、スポーツは学校だけっていうか、自分で自主練やる分にはいいんだけど、お父さんに言われてやるのが嫌だったみたい。

看護師　ちなみに、何部に入っているんですか。

Gさん　バスケです。二年生と一年生で、今やっているけど。その、メインが二年生だけど、一年生の時から（次男は）選ばれ、スタメンに入っちゃったんだよね。だから、お父さんは、そこのポジションを、いつ違う一年生に取られるか分からないからっていうのがあるみたい。

看護師　お父さんは、（次男に）期待しているのですね。

Gさん　そう。でも、次男本人は別にいいらしい。俺らは俺らで一年生同士仲良くやっているし、たまには俺じゃなくて、違う人が出ればいいのにね、みたいな勢いだから、自分が選ばれているっていうのが分かってるようで、分かっていない感じ。お父さんはやっぱり嬉しいよね、子どもがそういうふうになるとさ。だから、「いつ、スタメンから落とされっか分かんねーからな。がんばってやれよ。あれとこれはしなくちゃな」とか言うんだよね。思春期の時期に大体、こういうふうにやってみろとか（父が）言うから、「やりたくないんだよ」って、（次男が）言ってんだけど。（父は）熱くなっちゃってダメなんだよね。

看護師　お父さんは、結構熱い人ですか？

Gさん　スポーツに関しては。勉強は、別にそうでもないんだけど。自分もまあ、陸上とかね、やってきて、熱い、その部分は。

看護師　スポ根ですね。

Gさん　そうそう。私は、もうそこらへんは野放しで、何も言わないから。逆にきっとお母さんの方がいいんだよね。子どもにすると。

子どもの部活の親に夫は話していたみたい。私は知らなかった。「本当は心配なんだけれど言わないようにする。心配で仕事手につかない。お母さん死んでいなくなったら、俺大丈夫かな」って。

看護師　お父さんとはその後、病気のことに関してはどんな話をしてますか。

Gさん　お父さんは、後から聞いた話では、お母さんが滅入っちゃうから、「俺はほんとうは心配なんだけど、言わないようにするんだ」と、バスケ部の父兄のお母さんに、自分の気持ちの内を話したらしい。手術で入院しに行ってくるねーってなったときに、お父さんこうだったからねって本当に最後の最後に教えられた。私も一回ね、お父さんに、「何にも心配してくれないんだ？」と一回だけ言ったことがあるのよ。お母さん、こうやってやってくれているから、俺、言わなくても大丈夫かなって思って……みたいな感じで流されちゃったんだけど。私とすれば、「お母さん大丈夫？」ってほら、子どもたちは労わってくれるから。でも流石に抗がん剤で、（私が吐き気が強くて）うえーってなってる時は、お父さんが自らチャーハン作ったり、寝てろーって言って、なんでもしてくれました。でも、特に身体の状況をどうのこうのって聞くわけでもなく、具合悪くなったらやるみたいな。具合悪くない時は、いつも通りに振舞ってくれる。だから、病気の人（自分）が家にいるけれど、今まで通り、みたいな。

看護師　あえて普通にして、っていう。

Gさん　そうそう。だけど、その父兄のお母さんの話ではうちのお父さんが、「一週間くらい休みたいって、仕事を。もう、手につかない」って。「俺大丈夫かな……って、お母さん、いなくなったら」って。そういうことまで考えたみたいで、最初のうち。「手つかない、もう何やったってミスしちゃうし、頼むから最初の一週間くらい休みたい」って思ったんだよって。抗がん剤とか、一日二日とか寝たきりになる日とかあるから、そういうところを見ていると、

やっぱり辛い薬なのかなって思うって。でも、それが終わると、お母さんが「おはよー」みたいな感じで起きてくるから、それは、から元気なのかな？　と悩んでみたり、どうなのか、俺には分からない。でも、お母さんを目の前にして、「それは、から元気なのか？」と聞けないし。なんかね、お父さんの方がこういうとこ、小っちゃいの。もっと聞いてくれればいいのに、普通に接してくれて、逆にそれを父兄の人に、「実はこうなんです」って言っていたみたい。

看護師　このように、お父さんが気持ちを抑えて隠していたことは気づいていましたか？

Gさん　全然気づかない。普通なんだもん。考えてないように思うから、なんだよ、少しぐらい労わってくれてもいいのにとか。でも、具合悪い時にやってくれたから、感謝はしている。「ありがとうね、お父さん」みたいな感じで。言われれば、気分もいいみたいで、「いいよ、別に。あとは寝てろよ」とか。

看護師　旦那さんが、心配しているのが分らなかったのですね。

Gさん　そう。分かんなかった。「嘘でしょう、それ、うちのが、言ってたの？」って、「本当だよ」みたいな感じで。でも、まさか作り話にもならないような、うちにしか分からないような話だから、あ、本当だって。

看護師　それを聞いて、どう思いましたか？

Gさん　やっぱり嬉しいよね。なんか、そこまで悩んでいたんだっていうのも。本人から、「大丈夫なんだよ」という言葉を聞いたら、なんぼ（どれだけ）楽だったのだろうと思った。（私に）言ってくれればよかったのに。逆に、何にも心配してくれないみたいに言った自分も、悪いこと言っちゃったとかなと思ったりもした。

病気になってから旦那さんに、「いっぱいやってくれて、ありがとう」と自然に言えるようになった。

看護師　旦那さんに思ったことは、その都度言えていましたか？

Gさん　言えていなかった、今まで。この病気になって、言えるようになった。今さら、恥ずかしいっていうのもあるし。でも、やっぱり、こういうこと（病気）になったら、いっぱいやってくれて、「ありがとう」と、自然に言える。言えば、お父さんもそれに応えてくれているから。もう（乳房を）取ったら、なんか子どもたちの前で恥ずかしいとかじゃなくって、言うようにしようかなって。手術して帰ったら、真っ先にお父さんに、「ありがとう」を言わないとなって。家を任せたこともなかったし、私がどこか行く時は、子どもを連れて行っていたから。お父さんに、子どもをお願いすることなかったからとにかく心配だった。最初は（抗がん剤治療入院が）三泊と長かったから、大丈夫かなって。でも、『お母さんお帰り』っていうこういうあれがね。

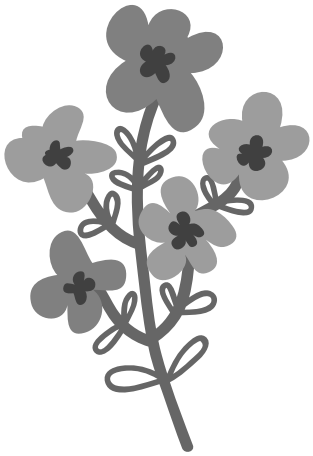
看護師　（私が退院した時に）お子さんたちが、駅まで迎えに来て、『お母さんお帰り』って、横断幕持っていたんですよね。

Gさん　そうそう。それで嬉しかったのと、家も家で思ったより、全然出来ていたし、洗濯物も干してあった。自然に、「ありがとう。え！　これお父さんやったの、すごいじゃん！」みたいな感じで、任せられるっていうのもあった。そこからだよね、本当

にとにかく、「ありがとう」しかないんだよね。自分も、もう仕事休んでいるし、お金のことに関しても、何に関しても、お父さんの給料で入ってくるしかないから、立てるようになったっていうのもあるけどね。

看護師　お父さんと、これからの治療に対する不安を話し合ったりしますか？

Gさん　あります。やっぱり、隠すことなく。放射線ってどうなんだろうとか、お金（治療費）どうするとか、そういうことは。私、すごく簡単に考えてるのかなって思う。なんか、乳がんやっても、普通のいぼ取ったような、そんなに重い病気って受け止めてない自分もいたみたい。違うな、入院して、（他の患者を）見てからなのかなあ。



みんな平気で、「じゃあねー」って帰って行ったりしている（退院している）。最初だけ、その、「乳がんです」ってその病院で言われた時だけなんだよね。ここの病院で診察された時も、先生がこんな顔（しかめ顔）とかしないし、「大丈夫」って言ってくれて。そんなに、生死をさまようような病気じゃないっていうか。そういうのがあるから、不安があるっていうのは、新たなことをするのに、放射線とかホルモン療法をしますっていった時に、どうなっていくんだろうなっていう不安ぐらい。

看護師　今後の治療よりは、経済的な心配ですね。

Gさん　お金とかね。

看護師　現実的なことですね。

Gさん　そうそう。（病気のことは）子どもにも話すこと。隠さないことが一番だと思う。後はね、こういうふうな（落ちていくような）気持ち、不安な気持ちはないです。家族に、子どもにも話すこと、隠さないことが一番だと思う。状況にもよるけど。モチベーションのいい時や、普通だったりするときは、「実はさー」みたいな感じで、暗くならないように、こっちが暗ーく言っちゃうと、子どももやっぱり暗ーくなっちゃうから。このままのテンションで、やっぱりこうだったよみたいな感じで、言うとすんなり受け止めてくれたのかな。同じ病室に（病気のことを）言えずに悩んでいたお母さんがいた。「Gさんは、どうなの？」って言われて、「私は全部言っているんだー」って。「この間、見せてみたら、本当は（子どもの反応が）うわーっていうのを想像していたんだけど、えーそうなんだ、みたいな感じなので、やっぱり言ってみるもんだよねー」と（同室者に話しました。）だから、状況によるよね。言える範囲だったらいいんじゃないかなって。うちは全部いい方向に、手伝いもしてくれるし、「髪の毛生えてきてるじゃん」とかも言ってくれるし（笑）。ただ、傷は、どうしようかなって思ったんだよね。なんか、それこそ一番下（の子）がね。（インター）ネットも、善し悪しだよね。検索したら、『五歳の子どもと、一緒にお風呂に入れなくて困っています』（と書き込みがあった）。それを見ちゃうと、「ええ、入れないんだー」っ

て。今まで一番下と、一緒にお風呂に入っていたから、「みんな傷を隠すようになるんだね」って（思った）。私は何も知らずに、お風呂に入るつもりだったのに、それを読んじゃったために、入れない自分になっちゃって。どうしよう、傷って見せちゃだめなものなのか？　と思っちゃって。一番下も、お母さんが一緒に入ってくれるものだと思っているから、なんて言って断ったらいいんだろうって思ってたから。そこだけが悩みだった。そしたら、私の兄が、心臓手術をして、同じ病院だし、身近に妹がこうなっちゃったから、やっぱり傷も心配だったりしたんだよね。（私の）傷が大丈夫かっていう心配があったんだよね。お見舞いに来た時に、私の兄が、「胸見せてくれっか？」って言うから、「あ、全然大丈夫ー」って見せて。「俺、傷が心配なんだよー」って言ってくれて。ほら、とかって見せて。「ああ、大丈夫、大丈夫。すごくきれいだなー」って。「俺の時みたいにはなんねえな」っていう話をした。そのときに、一番下（の子）がチラッと見てたの。さっきまでお風呂どうしようって思っていたのに、一番下を忘れてたんだよね、兄たちのことに夢中になっちゃってて。それで、子どもに、「うえ〜」とかって言われちゃったら、もうしょうがないよねって思って。「今見て大丈夫？」って言ったら、「あーっ！　すっげーっ！　おっぱいない。こっちは、あるんでしょう？」とかって言われて。「うん、あるある」って言って。「ふーん」で終わり。なんだよー、あんなに心配していたのにさー。しかもその時、管入っていたからね。管が身体にあるのに、何も言わないし。「ああ、じゃあ、この赤いのは血？」とかって。「さっきの、ここから出ていたのは、ここなんだ」。うん、そうなんだよ、取り越し苦労なんだよ、全部。でもね、さすがに傷は悩んだ。見せるべきか、見せざるべきか。うん、（インター）ネットを見たのもあったし。結構、言っちゃって、大丈夫なんだね。見せるかどうか迷っているお母さんいたからね、他の人も。たまたま見せたって。やっぱりお母さんが帰って来ると、みんな一緒にお風呂に入りたいって思うんだよね。「一緒に入ったんだー」って。そしたら、最初は子どもに、「えー」って見られたけど、あとは普通に、それを忘れて、お風呂でワイワイってやってるって言ってたから、「いつの間にか忘れてんだよねー」って。だから、取り越し苦労なことは多くあります。

ある意味、この病気自体はなってしまったからしょうがないと思うけど、この子たちを見ていると、悪くなかったかな。

看護師　お子さんの反応は、こちらが考えていた反応とは違っていたのですね。

Gさん　そう。でも、それはもしかして、小さい子限定だったりするのかな？　もしかしたら。お兄ちゃん、中学校になっちゃうと、やっぱり、思春期の時は、やっぱりオブラートに包んで、でも伝えた方がいいと思うかな。「実はねー」、「聞いて驚かない？」みたいなところから入ってあげたらよかったかな。私上の子たちに、「見てこれ、はげだから」ってやっちゃったから、ちょっとショックだっかなって思ったけど。絶対伝えた方がいいと思う。絶対優しくな

るし、労わってもらえるし。私、手術直後部屋に入った時に、これは後から聞いたんだけど、なんか朦朧としてた。皆いてくれたのは分かっていたのね、「お母さん」って、唯一私に声かけたのが、長男だけだったらしい。その時に、「お母さんがんばったね、お帰り」って、「もう大丈夫だから、後は何もないから、お母さんがんばったね」って言ったんだって。それをおばあちゃんから聞いたけど、「もう悪いところ取ったから、大丈夫だから」って言ってくれたらしく、おばあちゃんも声出して泣いたみたいで。良いこと言う長男だねって。次男とかは、ほんとうに、ぽー……、みたいな感じで、見とれただけで終わったけど、唯一、長男だけがね、言ってくれたんだって。もう悪いところないからって言ってくれて。

看護師　お子さんたち、それぞれに違う反応だけど、病気を伝えていたから、手術したお母さんに声をかけることができたんですね。

Gさん　そうだね。まあ、長男と一番下からはいっぱい得たものがあったかな、感情の部分でね。でも、次男たちも、テーブル拭きとか、手伝った部分では、なんか、良かったなって思ったけど。ある意味、この病気自体はなってしまったからしょうがないと思うけど、この子たちを見ていると、悪くなかったかな。そうでなければ、「お母さん、お母さん」って言ってくることもなかっただろうし。これがあったから、あの子たちも米研ぎなんか、別に覚えなくてよかったことを覚えてとか。お友達にも優しくなれた一番下（の子）もいるし、良かったのかなあなんて思ったりして。一番触れ合えたかな、子どもたちと。この病気をきっかけに、「今日お母さん大丈夫なの？」とか、だって普通に生活して、仕事して、昼夜も仕事して、あれしなさいこれしなさいとか、「もう終わったの？」とか、「もう終わったよー」みたいな、こんな感じだったから。「お母さん、お母さん」って、まずもって寄ってこなかったもん。一番下は別だけどね。今までと変わらないけど。うん、みんな離れつつあるような感じだったから、良かったかなぁ。

看護師　入院している間、お父さんは頑張っていましたか？

Gさん　一番下（の子）は、私が入院するときに実家に連れて、前泊まりをするんですよ。その時から一番下は、ばあちゃんに面倒を見てもらって、幼稚園も全部休ませて。他の子はお父さんに任せて。小学校も中学校も隣り合わせだけど遠いです。だから、そこまでずっと三人で行くんです。雨の日は送り迎えしているんですよ。お父さんは、「行けるだろ？」って言うのさ。だから、お父さんだけの生活の方がピリッとしているんだって。朝も早く起こされるし、私はぎりぎり、もうそろそろ起こした方がいいかな、起きなーって感じだったけど。もう、お父さんは起床と同時に、何にもすることないのに、五時半には起こされているみたいで。だから、子どもたちは訳分か

んねーし、ご飯も食べ終わったけど、まだ六時だしみたいな。何すっぺ（何をしよう）？　みたいな。それも善し悪しで、たまたまその日電話したの、朝。そしたら、長男がなんか二度寝していたみたいで、「よかったよー、あんまり早いからやることなくて、お父さん行っちゃったけど二度寝してたー」って。「危ねー（危ない）、今から行くから学校」って（笑）。

看護師　そうだったんですね。下のお子さんは、治療中どうだったのですか。

Gさん　ドライブで、一番下と一緒に来て、必ず行く時はマックに寄って、帰りはジャスコ（スーパー）に寄って、それが日課で。一回そういうふうにやっただけで、必ずジャスコ行ったら買うんだよねー、仮面ライダー・シリーズとか。だからもう、うきうきして、「お母さん、今日お泊りの病院だ〜」ってうきうきして、「今日病院の日？」なんて言って。「ぼく、幼稚園休めるの？　じゃ、帰りはジャスコに行こうね〜」（笑）「はいはい」って。ジャスコに行けるって。マックとジャスコ。

看護師　定番。

Gさん　増えていますよー。仮面ライダー。もう、勘弁してよ（笑）。

一番心配なのは、仕事のこと。続けられるかなぁ、怖いよね、むくみ。

看護師　今後の心配事はどうですか。

Gさん　そうだね。子どもとの生活とか家族との生活は、多分、このまま大丈夫かなって思う。一番心配なのは、仕事のこと。私、復帰をする予定でいるので、その、リンパを取った時に、むくみとか、身体のことですよね。こっちのほうが心配だなっていうのがあって、続けられるのかなぁっていうのが。でも、店長もすっごく寛大で、普通だったらこうなったら一回辞めようってなるんだろうけど、休職扱いにしてくれて、休職を延ばすために、色んな手を使ってやってくれて。（私が店長に）「こうなったらね、店長、こう（腕が）腫れちゃうかもしれない、そしたら私（仕事）できないかもしれないよ。そんなにいっぱい（休職延期の手続きを）やってくれるんだったら、私辞めようか」って言ったら、「なに言ってんだよー」って。「今までこう、一回で出来たことを、片手で二回やればいいじゃないか」って。「それでいいよ」って（店長が言ってくれた）。「最初からいっぱい働かないで、最初の一週間は二日だけにするとか、時間を短くしてとか、調子づいたら、いつもに戻ればいいじゃないか」って言ってくれて。みんな、待っているんだって。必ず復帰したいけど、怖いよね、むくみ。それぐらいかな。私ね、今の一番の楽しみは、抗がん剤していた時からここ（病棟）に来るのが楽しみの一つだった。あとはね、その、三人ともバスケやっていて、それの観戦が楽しみで。うん、一番下連れてね。具合悪いのにたまたま当たらないの。全然当たんなくて全部（観戦に）行けたの。それで元気もらって、嬉しい。それと、お母さんたちの親の会があるから、その親の会の人たちも一応ね、事情知っているから、ずっと気を遣ってくれる。「座ったら？　あったかくしたら？」と言われて、気を遣ってくれている。今までと変わってないの。観戦もできているし、親の会の人たちとの、なんやかんやも普通だし、だから、出来てないっ

て言ったら仕事だけ。うん、だから、そこだけが不安で。

看護師　次男の思春期の反抗は、落ち着いたんですか。

Gさん　あれは、あのときで落ち着いた。なんだったんだろう、子どもの反抗期。私の具合悪いのとそれが重なっちゃったみたいで、いっときでほんとうに終わった。次男が長男ともちょっとね、うまく合わない時期があって。「なんだよ……」みたいな感じになって。今となればなんだったんだろう、みたいな。

看護師　Gさんが、何か働きかけたのですか？

Gさん　私もなんだかんだ言ってもね、その時言ったのかな。最初ね、特に次男だよ。とにかくそういう時期で、お父さんが出張に行って、なおった。次男が、とにかく、私が具合悪いって言っていると、「チっ」とか、他の子はこうやってかばってくれるのに、そう、次男だけはね、とにかくね、嫌なんだよね。うざい、みたいな。お母さんのそういう（治療して具合が悪い）のも嫌だ、みたいな。私が言ったことに対しても言い返してくる。それで、面白くなくてこっちも言ったりすると、病気だから、とかね。そういう時期が一時あったの。ほんとうにね、ほんとに四〜五日。

看護師　それを見て、長男がいらいらしていた？

Gさん　そうそう、長男がそれを見て、「ふざけんなよ！」みたいな感じで、すごくイライラして。そう。次男と私のやり取りで、頭にきて、でも、私じゃなくって、次男に言うんだけど、でもそれを見るのが私は嫌なの。次男が原因を作ってくるよね。すごくイライラして、お兄ちゃんもそのように言うから、次男はお兄ちゃんには言えないの。それで、「うん……」みたいな感じになるけれど、言われたところで頭にくるでしょ。そうすると、次男が他の下の子たちに、こういうふうにやる（叩く）の。ある日は、椅子を一番下（の子）が使って、次男が長男に言われて、頭にきて、バーンて椅子蹴ったんだよ。そしたら階段のところだから、椅子ごと一番下（の子）がダダダって落ちちゃって。私がちょうど下にいたから、「何したの！!?」って言ったら、一番下がその時は固まっていて、しばらくしたら、うえーって泣いて。階段から落ちこちたと思ったら、次男がいて。「何やってんだよ！」と言ったら、自分もびっくりしていたんじゃないの、次男も固まってて。俺はお兄ちゃんにこういうこと言われて、まさか（弟が）階段を落ちると思わずに軽くガーンて蹴ったら、落ちていった、みたいな。「ダメだよ！」って言ったけど、放心状態で。しばらくして、下に降りてきて、「大丈夫？」って一番下のこと撫でていたけど。私が原因だと思ったから、この病気のせいだと。後から聞けば（原因が）お父さんだったから、解決。でも私がこんなんだから、言われんのも嫌なのかなとか。次男に「あれしなさいこれしなさい」って言うのも、「病気のくせに、がんのくせに」みたいな、そんな感じで受け止めていたと思っていたの、私が。どう接すればいいか分かんなくて、うん、負けちゃいられないところもあって、次男にがーってやれば、バーンってやり返して、お兄ちゃんから言われるとこうなっちゃうから、もうどうしようって思ってた矢先に、お父さんが出張

に行って。その時だよ、その時に、看護師さんに、「どうしよう。なんか、かみ合わない……」って言って。それで、家に戻ってみたら、お父さん出張行ったから、なんだったんだろう？　みたいな。実は、お父さんにバスケのこと言われるのが嫌で。そう、それだ、それ。もう何もかもうまくいかなくって。

看護師　兄弟喧嘩はするしね。

Gさん　そう、大変だった。「おらー！」とかって始まるし。男だから、力が付いているから。なおさら一番下はお母さんのことをかばうんだよ、「そんなことしないで！」ってかばうから、次男が、「うるせー！、おらっ！」みたいな感じになって。一番下は、かばっているのに、なんで？　みたいなね。

ホルモン治療を始めるって時に、どうなるんですか？　って聞いたら、「閉経」って言われたのがショックだったな。ああ、女じゃなくなるって思って。

看護師　Gさんのお母さんはどうでしたか？

Gさん　お母さんはね、多分私がいないところでは泣いてんの。だけど、なんか、私の前では、私が涙をこぼしたら、あなたは多分もっと大変になるから、私だけでも気丈に振舞おうって思っていたみたいで。私の前では気丈に振舞ってくれた。でも、やっぱりお父さんとかに聞くと、泣いていたぞって。もうね、とにかく「私が代わってあげたい」って。うん、全部言われたね、おっぱいなくなったら泣いたなぁお母さんは。兄に見せた時、お母さんも来ていたけど、私は、「ほら」っていう感じで見せて、お母さんは、「えー、そうなんだー」と言いながら、見ていた。「そっか、がんばったね」って言いながら涙拭いていて。結構かわいそうだって思ったみたい。「なんで私じゃないんだろう」って。抗がん剤で苦しい時とかも。後はね、私も、泣かないとは思っていた。その、ホルモン治療を始める時に、どうなるんですか？　と言ったら、やっぱり、生理もなくなるし。「閉経」っていうのがショックだったかな、女じゃなくなるって。その、「閉経」っていう言葉を聞いた時に、じゃあもう、女じゃないんだよねっていう感覚になって。髪はもうないし、おっぱいはいずれなくなるしそれで、生理も来なければ、女でもない。お母さんから生まれてきた時は女で生まれてきたのに、私もう女じゃないよね、この年にして、もう女終わりじゃん。その時は、もう、泣いた、泣いた。がんを告知された時よりも泣いたかも。それまでは、何とも思っていなかったはずなのに。先生に聞こうと思って、「教えてほしいんですけど」みたいに言ったら、カルテ見ながら、「多分これだったら、こういう経緯をたどって」って。「え、ホルモン剤って、なんですか？」って言ったら、「うん、こういうふうになるよ」と言われて。その時は普通に、そうなんだ、ひげとか生えてこないよね？　みたいな感じで、冗談で言うことができて、病室に戻っても普通に振舞えていたの。ところが、実家に寄って、帰るねーって車を運転した瞬間だよね、一番下が助手席にいたけど、ひとり、ぽつーんってなった瞬間に、「もう女じゃないんだー」。はげるし、おっぱいなくなるし、なにそれ？　それまでお

母さんと会っていたから、もう、お母さんごめんね……。女に産んでくれたのに女じゃないし。お母さんの前では泣かなかったけど。それ泣いたのがいけなかったのかな。前はタバコ吸っていたけど、ずっとタバコやめていた。もう、その時は自然に、コンビニに行っていた。分かんないの。抗がん剤で味覚障害になっているから、もう、コーヒーも飲めなくなっているし、苦いし、まずいの。だけど、自然に、タバコ吸っていた。タバコはがんだって分かるまで吸っていた。分かってからやめたけど。その時、コーヒーとタバコを買っていた。飲めないんだよ、もうコーヒーまずいのに、抗がん剤やってから。それからずっと（コーヒー）飲んでなかったのに、飲んで。タバコも、今まで8ミリのやつを吸っていたけど、やっぱ身体のこと気遣ったよね。1ミリのタバコくださいって言って、コンビニのお兄さんに。お兄さんもいっぱい銘柄あるから分かんないし、えーって。「とにかく、1ミリだったら何でもいいからください」って言って買って。そのとき、車には一番下がいるから、もう即行コンビニの前で開けて、灰皿があるから、そこでもう、バーって吸って。その時も泣いてんだよね、もう周りも気にしないんだよ、全然。もう、泣ける、泣けるで。（抗がん剤治療で）もう鼻毛もないから、じゅるじゅる鼻水も出てくるしさ。周りからしたら気持ち悪いおばちゃんだよね。鼻水垂らしながら泣きながら。それで、一番下が車の窓からのぞきながら、こう、すっごい変な顔しているの。えー……って。やっぱり車に乗ってから、「どうしたの？」とかって。「ううん。なんでもない。ごめんね、ごめんね」って。家に帰ってから、一番下は家族に、「お母さんね、今日ね、車で泣いていたんだよ、いっぱい泣いていたんだよ」って。そしたら、お父さんにはこう、（小声で）「大丈夫、大丈夫」って言われていたけど。どんだけ引きずんだよって思うくらい、引きずって。治療から帰ってきたら、必ずお母さんが電話をよこすの。「今日無事着いた？　大丈夫？」とか。その時に、もう、泣いて、泣いて……。その時は電話越しに、お母さんも泣いていたかな、あっち（母）が、「そういう身体に産んでしまって、ごめんね」って。逆に、私が、「女で産んでくれたのに、女じゃなくなってごめんね」って言ったら、「何言ってんの」って。ほんとうに、そういう感じで、また一人でうえーって泣いて。でも、それでお母さんが言ったので、ほっとしたのかな。そしたら今度、病院電話しなきゃと思ったの。タバコやめたのに吸っちゃったから。もう、抗がん剤とタバコが合わなかったらどうしようって思って。結局電話しないで。次の点滴で行ったときに、「すみません、タバコ吸ったんだけど」って言って。そしたら、看護師さんから、「大丈夫だよ」って言われたから安心したけど。副作用的に、合わないと思ったから、変なことしてしまったーって、そこから自己嫌悪になって。その週はもうダメ、帰ってきて早々から。その三週間はね、なんか、いい思い出なかったから。

看護師　おっぱいを取ると言われた時には、そのような感じはなかったですか？

Gさん　おっぱいを取るときは、思わなかった。多分、見ていたからだと思う。手術の傷も、結構（同病者が）見せてくれるんだよね。それで、どういうあれにしよっかな、

再建がなんちゃらって言ってるから、もし何かあったら、再建でもいいかなって。でも私ね、おっぱい何のこだわりもないんだよね。だから再建も、本当に考えてない。温泉にも入れる、着けるやつってあるし、なんか、あるからいいやって思っていて。私痛いのは、絶対嫌だから。再建はしないで、でも温泉も行きたいし。ピンクリボンの温泉っていうのがあったじゃん？　そういうのを取ってきて、うん、温泉行く行くー。別になんか、もしみんなに見られたら、見たい人は見ればいいんじゃない？　みたいな。

看護師　自分は女性じゃなくなると思ったのは、ホルモン療法で生理が止まるってことが一番ショックだったのですね。

Gさん　そう。「閉経」っていう言葉？　なんだろう。

看護師　そこに、どんなイメージを持ったのですか？

Gさん　もうなんだろう、女じゃないと思って。なんか。生理もないし、私、抗がん剤終わったら、生理も再開すると思っていて。いや、面倒だよ、いやなんだよ、止まってうんと晴れ晴れしてるんだよ、パラダイスみたいな、もうちょっと続いててOK、本当はそうなんだけど。でも、抗がん剤終われば、生理も始まるっていう期待もあるから。生理だけなのかな、一概に、分かんないな。生理がないイコール女じゃない、じゃないけどね。

看護師　抗がん剤やって、手術して、いずれ髪も生えるし、元の身体に戻るっていう期待がありますからね。

Gさん　期待はあるよね。うん。なんかね、別に、見た目、誰もさ、見た目は女になってないとか、分かんないしさ。なんていうんだろう、子宮を取るとか、そういったのも別におっぱい取るのと同じで、違和感もないっていうか。もし子宮がんになったりとかして、子宮が取れるとしても、別に私は何もないの。おっぱいと同じぐらい。終わっちゃった、女が、みたいな。気持ちの問題？　なんだろう、無くなるのはいいの、なにも。病気だし。悪いところ取ってもらうんだし。思うんだけど、悪くないのになんで、女がみたいな。変な感じだよね。そう、閉経って響きというかね、なんかね、女が終わります、終わりましたーみたいな。かといって赤ちゃんを産みたいとかそういうのもないし、何にもないんだけどね。

乗り越えることは二つあったかな。乳がんって診断聞いたことと、閉経になっちゃうってこと。

看護師　自分の中の女性っていうものの、象徴みたいなところがなくなる感じでしょうかね。

Gさん　もう、パーン……って飛んじゃったっていうか。もう、ガラガラガラ〜ッみたいな、終わっちゃった〜。それは、きつかったねー。ほんときつかったー。やっぱり、あれだね、お母さんと話したことかな。「産んであげられなくて、ごめんね」っていう言葉を聞いたりした時に、何私やってんだろう？　最初は、女の身体で生まれたのに女の身体じゃなくなって、って思ったんだけど。それで、お母さんと話した時に、「ごめんね」と言われた時に、私なんて失礼な、女で産んでくれたお母さんに感謝しないと。失礼なこと電話で言ったよなって。それから随分ふっ切れて。乗り越えること

が二つあったのかな、乳がんって診断聞いたことと、あと、閉経になっちゃうっていうことを聞いた時にきたけど、あとは全然。

抗がん剤治療で入院するときに、看護師さん・薬剤師さんに話しを聞いてもらえる。それは、「自分のためになる旅です。」本当にね、ここの看護婦さんたちいい人で、ほんとうに救われたと思う。ほんとう何だろう、特にこの人が気に入ったから、この人がいいとかじゃなくって、みんな（看護師）が来てくれて、この人来なきゃいいのにっていう人が誰もいないし。優しんだよね。本当に思う。みんな言っている、ここに来て。だから、どうしても違う病院で受けなくちゃいけない人いるじゃない、これから、まあ、自分もね。そういう時とかは、なんか、今後行く病院のスタッフ、看護婦さんのことを心配している。自分の身体より。みんなそうだよ。うん、私もそうだけど。こんなにいい人いないよねーって。他行ったら多分、「はいはい、痛いのね、そんなのしょうがない、はいはい」みたいな。「これは、病気だからしょうがない」みたいな、なんか、言われるんだろうねーって。だから、絶対ここに戻って来るって言っている。だから私も、なんかね、入院して抗がん剤受けに来て、点滴受けるのは嫌なんだけど、（看護師と）話ができるでしょう。なんかね、同じ病気をもった人と話せるっていうのもあるけど、ホールの小部屋で看護師さん聞いてくれるでしょう？　秘密の小部屋で（笑）あれが結構、「さ！　来たぞ、この時間！」みたいな感じで、言いたいこと全部言って、もう、そうなんだーって全部さ、なんか途中で止めたりしないし、人の話を止めないし、うんうん、って聞いてくれるしさ。薬剤師さんもすごいよね、看護師さんだけじゃなくて、もう、薬剤師さんとかも。うん、すごく好き。出来ているんだよね。これって、ほんと不思議に思う。ここ（乳腺治療・再建センター病棟）だけ？　それとも違う科？　外科とか内科とか？　眼科とかに行ったらどうなんだろう？　すごい力になったなあ。こんなに楽しみにするなんて、普通だったらなんかね、三週間経って、ああ、また、抗がん剤だ……、じゃあ……、行ってくるよ……、みたいな暗い感じなんだろうけど。でも、ここに来る時はね、ちょっと、「じゃ！　行ってくるから！」ってね（笑）。置いてく子どもたちには悪いけど、『自分のためになる旅』みたいな感じです。いつも、ありがとうございます。

看護師　貴重なお話を、ありがとうございました。

— 終 —